

ラウンド制指導法を軸とした「英語の学力」と 「使える英語」の基礎的な力を育成する指導法

学籍番号 169984
氏名 吉浦 諒
大学院主指導教員 岡 博昭

1. 研究の背景と目的

現在、従来型の英語の授業からの脱却が求められている。またセンター試験は2019年度の実施を最後に廃止され、これに代わり2020年度からは「大学入学共通テスト」がスタートする。英語に注目してみると民間の試験を活用し、4技能「読む」、「書く」、「聞く」、「話す」を評価するテストに変更される。そのことを踏まえ従来重視されてきた「読む」「書く」中心の「英語の学力」を保ちながら、またグローバル化やオリンピック・パラリンピックを見据え対応するために、「聞く」、「読む」、「書く」、「話す」の4技能をバランスよくトレーニングし、情報や考えなどを外国人に対しても積極的に伝えコミュニケーションをとることが出来る「使える英語」の育成を図ることが求められる。そこで注目したのが、ラウンド制指導法である。ラウンド制指導法とは、元京都外国語大学教授鈴木寿一氏が提唱したもので、「多様な方法を用いて、いろいろな角度から一つの教材を学習させる指導法で文法・語彙の内在化と言語処理能力を向上させることができる。そして、リーディングとその他の技能を統合して、コミュニケーション能力を伸ばすとともに、大学入試にも対応できる英語能力を養成することができる指導法」である。本研究では、ラウンド制指導法を軸とした授業実践を行い、有効な使い方と改善点の考察について報告する。

2. ラウンド制指導法を用いた授業実践

基本学校実習Ⅱでは、ラウンド制指導法を用いて授業を行った。この実習で筆者は、インプットとインテイクを繋ぐ活動に重点を置いた。インプットとインテイクを繋ぐ活動としてディクトグロスという活動を加えた。今回はディクトグロスの考えに基づき、CDで流す本文をパートごとにメモしながら聞き、その各段落の内容に合う絵を選んでいく方式を取ることにした。授業開始日と最終日にはPre-testとPost-testを行い、ラウンド制指導法とディクトグロスの効果があるのか検証を行った。結果として、ディクトグロスに関しては、pre-testでは正答率が74%であった話の流れに沿って並び替える問題が、post-testでは正答率が95%まで上がった。

3. ラウンド制指導法を軸とした1技能重視型の授業実践

発展課題実習Ⅰでは、生徒のリスニング能力の向上を目指したラウンド制指導法を軸とした学習指導法と手順を探っていくことにした。上智大学外国語学部英語学科学科長和泉氏によれば「リスニングは、言語能力の4技能の中でも一番基本的な能力である。」と言っている。そこ

で今回は基礎となる能力を高め、他の英語能力を向上させるための基礎作りを行っていくことにする。授業では、リスニング能力を向上させるための活動を組み合わせた。Pre-test と post-test (英検 3 級と準 2 級の過去問を使用)を行い、効果の検証を行った。結果として生徒にたくさん英語を聞かせ、活動をさせたので生徒のリスニング力は 3 級の問題では正答率が 75%から 80%に、準 2 級の問題では 74%から 83%まで上がった。ディクテーションの問題は 3 級の問題では、殆ど変わらなかったが、準 2 級に関しては、23%から 33%まで上がった。

4. ラウンド制指導法を軸とした 1.5 時間完結型の授業実践

発展課題実習 I で効果のあったリスニングの時間と生徒の活動の時間を一回の授業で確保するのは難しいので、1 パートを 75 分～80 分(1.5 時間完結型授業)で設計した。授業 3 時間で 2 サイクルの授業を展開していく。このように授業を設計することで、復習する時間を設けることができ、次の授業のスタートとのつながりが良くなり、新たな効果が生まれることを期待して行った。今回は、事前・事後アンケートで効果を検証した。結果として、生徒たちは 1.5 時間完結型授業に賛同する声が多く、1.5 時間で授業設計することで、1 時間の授業では厳しかったアウトプットの時間を取ることができた。また 2 回目の授業の最初に復習の時間がとれるので、生徒は前時の授業を思い出すことができる。そのため、生徒たちは本時の活動にすんなり移ることができ、発展的な音読などを行うことによりアウトプット活動にも自信を持って取り組めるようになっていた。アンケートのコメントでも、時間をかけて学べるのでわかりやすかった、簡単な活動から難しい活動へと段階的に活動を進めていくので、難しい活動にもチャレンジしやすかったなどの意見があり、生徒たちの支持を得ることができた。

5. 今後の展望

これまでの従来型の授業を「木から森へ」とすると、今後求められる授業は「森から木へ」であると和泉氏は述べている。従来型の「木から森へ」の授業は、正しい知識を伝授することが主眼とされるため、ほとんどの場合、教師主導の解説調の授業となる。つまり、1 文ずつを細く訳すことで、全体ではなく細部にしか目がいかなくなってしまい、全体のつながりを把握することが難しい。この「森から木へ」の授業は、私がこれまで取り組んできたラウンド制指導法と CLIL、フォーカス・オン・フォームを融合させたものである。CLIL とは、言語学習と内容学習を融合して教える中で、外国語の「聞く」「話す」「読む」「書く」の 4 技能の育成を目指す教育アプローチである。また、フォーカス・オン・フォームとは、意味内容とコンテキストがある言語使用環境の中で、必要な言語形式に相応の注意を向けていくことで、流暢かつ正確な言語能力の育成を目指すものである。「森から木へ」の授業は、教科書の全体→細部→全体へと進めて行く。ラウンド制指導法では、全体から細部、そして全体へと学んでいく、「森から木へ」の学習形態はできているが、「主体的・対話的で深い学び」の要素をいれることが難しかった。そこに、CLIL やフォーカス・オン・フォームの要素を取り入れることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが可能になるので、取り入れていく必要があるのだろうと推測する筆者も「森から木へ」の授業が展開できるように精進していくつもりである。